

説教 『永遠にキリストの臣民』山本 護 牧師  
聖書 コヘレトの言葉 3:14~15/ルカによる福音書 1:31~38

開拓伝道を始めた当初の数年間、文字通り「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである(18:20)」という礼拝であった。ほんの数年前という気がするが、勘定してみるともう四半世紀。私はいつのまにかオッサンになり、御心に従ってやって来た、という自覚や自負は、まるでない。ただふり返ると「キリストに捉えられていたなあ」という痕跡はある。

そういう心持ちで待降節の記述を読んでいたら、これまで気づかなかった意味が、ふいにぐっと迫って来た。「その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない(ルカ1:32~33)」。

私が好きなのは無頼漢で庶民的なイエスさん。だから、「王座」とか「支配」の文脈で語られるキリスト様のことは、半ば意識的に避けて来た。イエスが王だとしても、臣民にされるのは御免だぜ、という思いからなのか。だがキリストの王権は、私を捉えて離さなかった。とはいえ、そのことで息苦しく感じるようなことはなかった。むしろ私の自己規制が、私自身を縛っていた。自己規制が私を押し曲げようとする時、キリストの王権が「私の世間」から臣民の「私」を取り返してくれていた。

「彼は永遠にヤコブの家を治める(1:33)」。キリストが「私」を治めるのも「永遠に」なのだ。生まれたばかりで自我がまだない時も、なにかと反抗的だった少年期にも、それからいろいろ揺れ動いて今日に至るまで、キリストの王権は私を臣民として見守り、すべての試みを歓迎してくれた。今までそうであったように、これからの試みも歓迎してくださるだろう。私が善人であろうと悪人であろうと(マタイ5:45)、臣民であることを放棄しても、キリストの王権は私を捉えて手放さない。今も、後も、やがて召される時も、召されてからも、「永遠に」私を「治め、その支配は終わることがない(ルカ1:33)」。キリストの王権とは、なんとという遠大さか。なんとという臣民への愛なのだろうか。愕然とさせられる。

天使ガブリエルは「あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい(1:31)」と告げると、マリアは「どうして、そんなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに(1:34)」と応じた。マリアの疑いは当然だ。しかし天使は、疑問には答えず、一方的に受胎の神秘を語る(1:35~36)。するとどうだろう。なんとマリアは、「お言葉どおり、この身に成りますように(1:38)」、と己が身に起こるであろう世の苦難を承知で、不可解な神の御告げを静かに受け入れた。

「神にできないことは何一つない(1:37)」を直訳的に言うと、「神が語ったすべての“言葉”は不可能ではない」。マリアは「その“言葉”どおりに」と応じた。私たちは揺れ動く信仰から、神の御計らいを前に怯む。しかし、神の口から発せられる“言葉”は、世の狼狽を意に介さず、すべて必ず実現する。マリアは、地上に生きる私たちの一番前で、その言葉を、自らに優先して受け取った。

私たちもまた、キリスト王権の臣民として「不可能ではない言葉」を受け取っている。だから「お言葉どおり、この身に成りますように」という覚悟でいたい。それが私にとって最良の道だから。



【おまけのひとこと】

誰にも縛られたくない 自分にも縛られたくない 時間にも空間にも縛られたくない だがその制約で呼吸している 制約を外したら私という存在は無くなるのか 永遠なる方がそれを知っている